様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１２０９

研究課題名（和文）貧困・格差社会に生きる高校生の自立支援をめざした家庭科カリキュラムの開発

研究課題名（英文）A Study of Home Economics curriculum to establish a sustainable living of Japanese high school students in unequal society

研究代表者
藤田　昌子（FUJITA, Atsuko）

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：４０４１３６１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，自分の将来に展望をもつことが難しく，社会的，経済的，精神的自立をすることが困難な高校生が自立した生活を営める力を育む家庭科カリキュラムの開発を目的としている。
　高校生の生活と労働に関するアンケート調査により課題を整理した上で，カリキュラムを開発した。このカリキュラムを使用し高等学校で授業実践を行い，次のような教育的効果が得られた。生徒は(1)雇用形態の相違によって格差が生まれ，利用できるセーフティネットが違うことを理解した。(2)体験的な学習を通して，自分の将来を客観的に把握することができた。(3)労働者への不当な扱いの改善を求めるなど社会を変えようとする意識の芽生えを確認できた。

研究成果の概要（英文）：This study is focused on high school students,with the purpose of developing a home economics curriculum that nurtures the capabilities for leading an independent life,for high school students who are finding it difficult to have hope for their future and to gain social,economic,and psychological independence. A survey concerning day-to-day life and labor was conducted to understand the current status of high school students. Issues that came out of this survey were sorted,and a curriculum was developed. Upon conducting lessons based on this curriculum,the following educational effects were achieved:
(1)Students gained how the available safety nets differ due to the disparity from difference in employment systems. (2)Students gained an objective understanding of their future through experiential education. (3)Students expressed and shared their feelings of despair and anger,and there was emergence of awareness for initiating change, such as demanding fair treatment for workers.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：格差社会　自立支援　家庭科　カリキュラム　高等学校

１．研究開始当初の背景

貧困の格差の拡大と 2008 年の金融破綻を発端にした経済危機により，正規雇用のシステムや社会保障などから排除されている若者が急増し，高校生の就職や進路なども深刻な社会問題となっている。加えて，若年ホームレスやネットカフェ難民など家族や地域・社会とのつながりを失って社会的に孤立した生活困窮状態にある若者も顕在化してきている（湯浅誠『貧困襲来』山吹書店,2007）。このような人々が貧困に陥った要因には，単に仕事や福祉からの排除だけなく，教育課程，健康，家族，人間関係，自分自身からの排除などがあり，この社会的な多重排除の状態が「現代の貧困」の特徴であることが指摘されている（本田由紀編『若者の労働と生活世界』大月書店,2007 他）。このように「排除」が多重化している「生きづらい」社会（湯浅誠・河添誠編『「生きづらさ」の臨界』旬報社,2008）に置かれた高校生は，自分の将来に展望を持つことが難しく，社会的，経済的，精神的自立をすることが困難になっている。また，親の経済状況は，彼らの進学や就職に深く関わるために，家庭の貧困は彼らの育ちや自立を阻害する要因の一つとなっている（子どもの貧困白書編集委員会編『子どもの貧困白書』明石書店,2009）。

近年の雇用問題や貧困の実態を踏まえた教育実践の必要性から，研究分担者・大竹と研究協力者・中野の「『生活設計ゲーム』の開発とその授業実践」（日本家庭科教育学大会要旨集,2006）や研究協力者冨田・坪内の「社会保険のしくみを学ぶゲームの開発とその実践」（日本家庭科教育学会誌 50(3),2007）などに加えて他２実践において労働・福祉・生活設計を扱った家庭科の教育実践があるが，それらは，本研究が目的としている「排除」の問い直しと豊かな暮らしを包括的に組みこんだカリキュラムの構築までには至っていない。

２．研究の目的

本研究は，貧困・格差社会に生きる高校生に対して自立支援を行うことをめざし，高等学校家庭科における家庭科カリキュラムの開発を目的とする。具体的には，生活と労働に関する高校生の実態調査結果を踏まえ，「セーフティネットを中心とした労働と福祉の内容」「貧困や排除の理論」「家族や住まいからの排除の実態」「生存権の維持と権利などの内容を盛り込んだ授業実践を行い，その教育効果を明らかにしようとするものである。

３．研究の方法

本研究では，「現代の労働，社会福祉の諸課題に対応した高等学校家庭科のカリキュラム構築」（2009～2010 年度日本家庭科教育学会課題研究）における基礎的研究を発展させ，研究の柱を①生活と労働に関する実態調査（質問紙調査，事例検討，インタビュー調査）と②実践的カリキュラム開発とその教育的効果測定の二つとした。

４．研究成果

(1)高校生の生活と労働の実態把握

山形・東京・千葉・神奈川・兵庫の公立・私立高等学校５校1～3年生 622 名を対象に，生活と労働に関する質問紙調査を実施し，高校生の生活と労働の実態を把握した。厳しい家庭の経済状況が影響し，生活費や学費の一部を稼ぐために厳しい労働市場に強制的に押し出された高校生の実態が明らかになった。そして，貧困は，現在の生活だけでなく，将来の生活に対しても影響し，生徒は就職や進学費用，就職後の生活費，結婚や子育て，介護に至るまで経済的不安を感じ，将来の展望がもてない状況であることが明らかになった。

(2)高校生の自立支援をめざした家庭科カリキュラムの開発

質問紙調査や事例研究により明らかになった高校生の生活と労働の実態と課題をもとに，自分の将来に展望をもつことが難しく，社会的，経済的，精神的自立が困難な高校生に対し，自立した生活を営む力を育む家庭科カリキュラムを検討した。高等学校の家庭科教育が置かれた現状に対応し，最低限の内容を盛り込んだ「４時間のカリキュラム（昨年度作成）」の改善に加え，５つの包括的な内容（①高校生が自分の生活をイメージすること，②セーフティネットの重要性，③労働と生活の保障，④生活資源 の獲得，⑤修学と進学）を盛り込んだカリキュラムの内容を発展させた。

自立した生活を営む力を育む家庭科カリキュラム

Ⅰ　一人暮らしを考えてみよう
教材①一人暮らしではどのぐらいお金が必要か
教材②クレジットと多重債務
Ⅱ　セーフティネットを保障する暮らし方・働き方を考える
教材③社会保険ゲーム
教材④ワーキングプアとセーフティネットについて
教材⑤社会保障制度○×クイズ
Ⅲ　働く権利を守る
教材⑥求人票を読む
教材⑦自分や仲間の働く権利を守る
Ⅳ　生きる権利とそのための資源を考える
教材⑧ハウジングプアから考える住まいの機能と住まう権利
教材⑨ホームレスからの脱出法
教材⑩暮しを守るセーフティネット生活保護
Ⅴ　私たちには学ぶ権利がある　高校生の修学保障
教材⑪　お金の心配なく高校へ通いたい
教材⑫　もし進学費用を自分で賄うとしたら？

本カリキュラムを実践することでみられた教育的効果は，以下の通りである。
①金銭面や社会保険，雇用形態の面から，自分の生活や将来の生活をリアルに考えることができるようになった。
②「生きづらい」社会のなかで自分の生活を守るためのセーフティネットの重要性と課題を認識できるようになった。
③雇用形態の相違によって格差が生まれ、利用できるセーフティネットが違うことを理解した。
④格差の拡大や不安定な生活を強いられることに対し，問題を指摘し，現状の改善を社会や政府に求めようとする気持ちが生まれた。

(3)社会への発信
本研究で開発したカリキュラムは，教材集『安心して生きる・働く・学ぶ　－高校家庭科からの発 信－』として出版した。本書は，高等学校家庭科に限らず，総合的な学習の時間，進路指導，また大学・短大でのキャリア教育や社会教育においても活用されており，教育現場に還元する，さらには学校教育にとどまらず社会教育への発展も視野に入れ，広く社会に発信していくことができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①中山節子，藤田昌子，小野恭子，田村愛架，教員養成大学間の連携による「社会保障」と「働き方」に関する授業実践，生活経営学研究，有，第 49 号，2014 年，24-34
②中山節子，貧困・格差・セーフティネットの諸課題を家庭科でどう捉えるか－「貧困生活シミュレーション」からの考察－，年報・大学家庭科研究，有，第 35 集，2014 年，19-24
③中山節子，冨田道子，藤田昌子，現代社会における貧困問題に焦点化した高等学校家庭科実践の意義－格差社会における労働と福祉を中心として－，生活経営学研究，有，第 48 号，2013 年，40-50
④中山節子，藤田昌子，家庭科の学習を通じで学ぶ安心な暮らしの営み：生活，労働，学びの保障と子どもの自立を支える家庭科教育，日本家政学会誌，無，Vol.64，2013 年，743-748
⑤中山節子，雇用問題とセーフティネット，Metis，無， Vol.1‐6，2012 年，3-4

〔学会発表〕（計７件）
①藤田昌子，坪内恭子，大竹美登利，冨田道子，中山節子，中野葉子，若月温美，松岡依里子，格差社会における生活経営に対応したカリキュラム開発－千葉県高校家庭科における授業実践分析から－，日本家庭科教育学会第56回大会，2013年6月30日，弘前大学
②大竹美登利，中野葉子，藤田昌子，中山節子，坪内恭子，冨田道子，松岡依里子，若月温美，A 校 B 校の生徒の感想の相違からみた格差社会における生活経営に対応したカリキュラム開発，日本家庭科教育学会第 56 回大会，2013 年 6 月 30 日，弘前大学
③冨田道子，中山節子，藤田昌子，セーフティネットに関する学習の意義－山形県高等学校の授業分析から－，日本家政学会生活経営学部会夏期セミナー，2012 年 8 月 28 日，お茶の水女子大学
④Atsuko FUJITA，Setsuko NAKAYAMA，Midori OTAKE，A Study of Home Economics Curriculum to Establish a Sustainable Living of Japanese High School Students in Unequal Society，国際家政学会，2012 年 7 月 18 日，Melbourne Convention Centre（オーストラリア）
⑤ Midori OTAKE，Home economics and Sustainability: the relevance to the follow-up on the UN MDG’s after 2015，国際家政学会，2012 年 7 月 18 日，Melbourne Convention Centre（オーストラリア）
⑥冨田道子，中山節子，藤田昌子，松岡依里子，若月温美，坪内恭子，中野葉子，高等学校家庭科における格差社会の諸課題を考える学習の教育的効果，日本家庭科教育学会第 54 回大会，2011 年 6 月 26 日，長崎大学
⑦藤田昌子，松岡依里子，若月温美，中山節子，中野葉子，冨田道子，坪内恭子，貧困・格差社会における高校生の生活と労働の実態，日本家政学会第 63 回大会，2011 年 5 月 28 日，和洋女子大学

〔図書〕（計３件）
① 日本家庭科教育学会編，大竹美登利，坪内恭子他著，学文社，生きる力をそなえた子どもたち それは家庭科教育から，2013 年，112-115
②大竹美登利監修，中山節子・藤田昌子編集，開隆堂，安心して生きる・働く・学ぶ－高校家庭科からの発信，2012 年，111
② Midori OTAKE，Michio MIYANO，Kei SASAI，Kuniko SUGIYAMA，Yoko ITO and Noriko ARAI，“What did we learn the 3-11 Disaster and How do we Need to Reconsider a Sustainable Life?“ in Donna Pendergast et. ed. *Creating Home Economics Futures the Next 100 Years*，Australian Academic Press，2012，218-227

研究組織
（１）研究代表者
藤田　昌子（FUJITA，Atsuko）
愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：40413611

（２）研究分担者
中山　節子（NAKAYAMA, Setsuko）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：50396264

大竹　美登利（OTAKE, Midori）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：40073564

（３）研究協力者
坪内　恭子（TSUBOUCHI, Kyoko）
都立白鴎高校・附属中学校・教諭

冨田　道子（TOMITA, Michiko）
東洋英和女学院小学部・教諭

中野　葉子（NAKANO, Yoko）
白百合学園中学校・高等学校・非常勤講師

松岡　依里子（MATSUOKA, Eriko）
大阪成蹊短期大学・総合生活学科・准教授

若月　温美（WAKATSUKI, Atsumi）
東葉高等学校・教諭